

ARGENTINA



発行：(社) 日本アルゼンチン協会 編集長：松本 アルベルト 会報第44号
〒105-0004 東京都港区新橋1-17-1 新幸ビル Tel:03-3501-4684 Fax: 03-3595-3932

E-mail:argentina@nifty.com (事務局) E-mail:jam@ideamatsu.com (編集部)

印刷：株式会社アイデア・インスティテュート 2004年4月20日発行 N°44-ABRIL de 2004

季刊会報 - BOLETIN TRIMESTRAL PARA SOCIOS <http://www.argentina.jp/>



■アルゼンチン食肉ミッション来日

Misión de carne vacuna y aviar argentina

アルゼンチンの牛肉と鶏肉の生産及び日本への輸出に対する現状と今後の見通しを紹介するため、農牧庁のクラウディオ・サブサイ次官補を団長として10数名の官民合同ミッションが先月来日した(同ミッションは先にマレーシアと香港を訪れており同じようなセミナーや商談会を実施した)。

滞在中農林水産省への表敬訪問や食料衛生管理当局との専門家間の技術ミーティング、商社や食料産業関係者との商談、スーパーマーケットへの視察等を行ったが、最も注目されたのが「アルゼンチン食肉セミナー：牛肉と鶏肉について」で、3月4日、東京商工会議所ビル4階の会議場で行われた(亜国大使館、米州開発銀行駐日事務所、日亜経済委員会の主催、大来財団の後援)。



当初の予定を大幅に超えて出席者が120数名となりアメリカやカナダのBSE問題や国内の鶏インフルエンザで新たな供給先を探しているという商社や食品メーカーの関心の高さを物語っていた。セミナーは、サブサイ次官のプレゼンテーションではじまり、その後専門的な観点からアルゼンチン農畜産品衛生事業団SENASAのエドワルド・コーエン・アラシ調査部長が講演した。民間からは鶏肉業者と牛肉業者を代表して各業界の現状と輸出動向を説明し、最後には日本側の視点と要望を伝えるために伊藤忠商事畜産流通課の鯛健一課長と日本ハム輸入食肉事業部の多田賢男部長がそれぞれ有意義な内容の話をした。

セミナーの後、夕方大使館の大使公邸で試食会を行い、次の日は特に民間業者は商談会に参加し日本の企業からは高い関心とともにビジネスの引き合いもかなりあったと報告されている。

(関連記事2頁)

■「マテ茶セミナー」ジェトロ主催で

FOODEXで行われた

Misión de MATE argentino en FOODEX

日本の市場では緑茶以外にもたくさんの種類の混合茶が販売されている。ペットボトルでの消費はお昼のお弁当だけではなく若者の間では常に携帯している”必需品”の一つとなっている。

こうした市況の中、ハーブティー、健康茶の一つとして「マテ茶」も少量ながら輸入されているが、販売店舗もごくわずかに限られているため、一般消費者にはほとんど知られていないのが現状である。そのため、3年前からジェトロ(日本貿易振興機構)は、途上国の産業育成及び輸出促進事業の一環として、アルゼンチンのマテ茶生産者の日本輸出拡大を目的に試飲セミナーや展示会出展等によって支援してきた。この事業の最終年度を迎えるにあたり、現地生産・輸出業者と日本のインポーター及びバイヤーとのビジネスマッチングの場を提供するため、今回ジェトロはFOODEX JAPAN内の「Tea & Coffee Plaza」というお茶やコーヒーに特化した集中展示コーナーに、「ジェトロマテ茶ブース」を設置したのである。アルゼンチンとパラグアイのマテ茶生産者4社(各国2社)が来日し、3月6日から12日の間、専門家を講師にした勉強会をはじめ、日本市場の視察、FOODEXでの「マテ茶セミナー」の開催とブースでの応対・商談に積極的に参加したのである。

セミナーでは、日本での数少ないマテ茶研究学者である城西大学薬学部医療栄養学科食品学教室の和田政裕教授が「マテ茶の効能について」と題し、40名以上の茶業界関係者の前で講演した。その後、4社の商品アピールを含めた自己紹介が行われた。

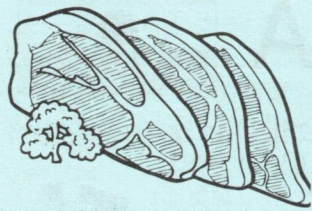


(関連記事3頁)

ASOCIACION NIPO-ARGENTINA: Institución con personería jurídica como Asociación Civil declarado de interés público (koeki hojin) por el Ministerio de Relaciones Exteriores de Japón para fomentar las relaciones culturales, sociales e institucionales entre Japón y Argentina. La Asociación se autofinancia con las cuotas de los socios y no depende de ningún subsidio público. Los directivos trabajan ad honorum.

(C)Copyright Shadan Hojin NIHON ARGENTINA KYOKAI Tokio.Minato-Ku.Shinbashi 1-17-1.Shinko Bldg.105-0004.JAPAN

■牛肉と鶏肉事情



Carne vacuna

牛肉：アルゼンチンは既にEUへ高級牛肉をヒルトン枠（約3万トンで2億ドルの売上を意味する）にもとづいて輸出しているが、今回のア

メリカにおけるBSEの発生により、日本のように米国産の牛肉に対して禁輸措置を講じた国々への新規又は困難な市場への参入を目指して来日したのである。日本に生肉を輸出するには「口蹄疫清浄国」となる条件を満たしていなければならないため、現時点では、農林水産大臣が指定する施設での過熱処理された肉のみが対象になっている。その他の国々には「ワクチン摂取条件付き口蹄疫清浄国」として生鮮、冷凍等も輸出しているが、アルゼンチン政府は日本にも同じく柔軟な対応を求めたとされている。

●牛肉の生産は世界5位。年間1千百万頭が処理され250万トンの肉を生産。一人当たり消費量は60キロ。

●ほとんどが牧草による飼育であるが、飼料に関しては自国の穀物が殆どである。

●牛肉の輸出は年間20数万トンで4億5千万ドル相当。世界8位。輸出先：ドイツ、イギリス、米国、チリ、ブラジル等。

Carne aviar

鶏肉：飼料は国内で調達し、鶏インフルエンザ又はニューキャッスル病とも無縁である。国内では胸肉の消費がメインで欧州向けの輸出も胸肉が主流であるが、日本の市場ではもも肉の需要が多いということで、日本輸出への期待も高い。



●年間生産は約90万トンで2003年の輸出は6万トン（5千万ドル相当）。主な輸出先：チリ、中国、ドイツ、サウジアラビア、南アフリカ等。国内一人当たりの消費量は約19キロ。

●生産者は生産拡大のために設備投資を積極的に行っており、生産プロセスの透明度を高めるためにバーコードによるトレーサビリティ・システムを導入している。

(c)JAM

(出所：牛肉のデータは2002年、アルゼンチン輸出振興局 Export.Ar、INDEC統計局、ジェットロ等)

■それ以外の肉輸出

Carnes no tradicionales al exterior

アメリカのBSE、アジアでの鶏インフルエンザ等今までの供給元の衛生問題等によって今アルゼンチンには牛肉や鶏肉、豚肉以外の変わっ

FOODEXに出展したアルゼンチン企業

マテ茶関係でジェットロ企画のブースに出展した2社以外にも例年通りワインや食品関係の企業が自社商品を出展した。アルゼンチン大使館商務部によると、国の輸出政策を実施しているアルゼンチン輸出振興局 FUNDACION EXPORTAR、大手食品会社のモリノス・リオ・デ・ラ・プラータ（商品：植物油(ひまわり、大豆、オリーブ、グレープシード)、ドライパスタ、冷凍食品、レモンジュース)、ニデラ（商品：ひまわり油、大豆油、とうもろこし油、プライベートラベル開発パッケージ）、ジョレンテ（商品：紅茶、マテ茶、ハーブティー）、グループ・ティンポー（商品：食塩、ナトリウム減量食塩、甘味料、エキストラバージンオリーブオイル、オリーブ）、ベンベヌート（商品：魚の缶詰、果物の缶詰、ジャム、豆の缶詰）、ボデガ・サレントイン（ボトルワイン）、ビニェドス・サンタ・ソフィア（ボトルワイン）。



Empresas argentinas presentes en FOODEX 2004

た肉の輸出にもチャンスが訪れている。

●馬肉：輸出国として世界1位。年間3万トンが輸出され、主な買い手はロシア、オランダ、フランス、そして日本で（1.700百トン）である。コレステロールが低く、タンパク質が多くなり重宝されている。

●バッファロー：水牛のことで東部や北東部に約60,000頭が飼育されている。肉は絞まっているがかたいわけではなく、最近一部の高級レストランでグルメとして調理されている。

●キジ：イタリアが主な輸出先だが、スペインやベルギーでも消費量が高いため、月1,000トンも出荷している。

●ウサギ：9,000の飼育業者が存在しており現在認証された生肉が年間124トン輸出されているが2003年の数字だと230トンまで伸びている。主な市場はスペイン、オーストリア、ブラジルである。中国のウサギがEUで禁輸措置を受けたため、イタリアやスペインでの生産だけでは足りない状態にあるという。

●野ウサギ：繁殖率が高いため、5月から7月の間にあの広いパンパ大草原で狩りによって”出荷”される。昨年、約4,000トンがドイツをはじめ、オランダやフランス等に輸出されている。認定された22の肉処理場で解体され骨なしと骨付きに分類・加工され、ヨーロッパ諸国のスーパーで生鮮として売られている。

●ワニ等：ワニの一種で現地ではジャカレー(yacaré)で知られており、財布の革としては高級

品だが、最近肉の需要も高まっている。許可を受けた飼育業者は皮も肉も売ることが出来るが、環境保全のため一定水準の成長過程にあるジャカレーは自然に帰ることが義務づけられている。その他、脂が少なく健康にも良い（コレステロールがほぼゼロ）ダチョウの肉の生産にも関心が高まっており、年間2万羽の出荷も可能だとされている。

(c)JAM

■マテ茶ブース大盛況

3.200 visitantes al Stand de MATE (JETRO)

JETROのプログラム担当者によるとFOODEX 4日間で約3200名の来場者がマテ茶を試飲し、商談も200件近くあった。健康食品サプリメントのメーカーや、アイスクリームのメーカーといった原材料として検討したいという飲料食品加工会社の関心も高かったようである。お茶専門の喫茶店や小売店からも、茶葉を検討したいといった話や、健康食品や輸入雑貨/食品を扱うような商社・卸企業が、ティーバッグの箱を検討したいということで「健康にいい」という部分に引かれて商談を行ったようである。いずれにしても、現地で加工瓶詰めしたドリンク式では

かなり難しそうで、やはり原材料としてのバルクか、ティーバッグ、インスタントマテの瓶などの完成品が有望視されている。



*出展者：エスタブレシミアント・ラスマリアス社 (Paul Navajas氏)、ルイス・デモントージャ農業共同組合 (Alfredo Kallus氏)、ラウロ・ラッツ (株) (Arnulfo SoleyとMirian Soley氏)、エスタンシアス・フリドリエヒ・ドラックスマイヤー社 (Peter Chripczuk氏)。

写真：(c)Yamada Yurie

NavajasさんとKallusさん、休憩の時もマテ茶を飲む。

取材協力：JETRO貿易開発部中南米班
アルゼンチン大使館商務部

●マテ茶の効能：Virtudes del MATE

一般論として気分転換、ストレス解消、鎮静効果、発ガン予防効果、胃潰瘍予防効果、動脈硬化・心疾患予防効果、血栓症予防効果、高血圧症予防効果、虫歯予防効果、アレルギー予防効果等。豊富なポリフェノールにカテキン類とフラボノイド類が多く含まれていることやカルシウム、鉄、マンガン、亜鉛等のミネラルの効果もある。興奮作用や眠気防止作用（覚醒作用）がある緑茶や紅茶に含まれている「カフェイン」とは異なった「テオフィリン」と「テオプロミン」という成分が入っているため、マテ茶は利尿作用で高血圧を予防し、強心作用で心臓病を予防、そして血行促進で女性の悩みの種である冷え性や冷房病を予防するために効果を発揮する。

●マテ茶の生産：Area producción del MATE

マテ茶は、アルゼンチン、パラグアイ、ブラジルを原産地とし、南米では日常的に飲まれている健康茶である。鉄分、カルシウム、マグネシウム等ミネラルやビタミンが豊富で現地では「飲むサラダ」と呼ばれている。肉食が多いアルゼンチンでもこのマテ茶（通常は容器にストローを入れて飲む）によって野菜不足を補っている。アルゼンチンは世界最大のマテ茶生産国で、世界の栽培面積のうち65%を占めており、次いでブラジルとパラグアイとなっている。

生産面積：190.000ヘクタール

年間生産：280.000トン

輸出量：約27.000トン（4割以上がシリア、ブラジル、ウルグアイ）

主要生産地：ミシオネス州のオベラ、サンイグナシオ、アポストレス（95%が25haの小規模農場）。50の加工工場があるが、大手3社が50%を占めている。

(c)JAM



日本のお茶市場-Mercado de Té en Japón：今、日本の市場では緑茶以外にもたくさんの種類の混合茶が販売されており、ペットボトルでの消費はお昼のお弁当だけではなく若者の間では常に携帯している”必需品”の一つになっている。

自動販売機、コンビニ、スーパー、そして既存のお茶専門店間での激しい競争があるが、最近、お茶にも様々なプレミアム（グッズ等）が付いて消費者の注目を少しでも高めようと必死のようである。また、通常のお茶より健康に良いという原料等を使用したお茶も出回っており、厚生労働省の特定保険用食品の表示許可を受けたものはその効能を明確にすることが出来る。

食品・茶類の流通事情に詳しい専門家によると日本茶ドリンク市場（緑茶、麦茶、混合茶）は267万klと、コーヒー飲料とほぼ同じで、飲料総市場の2割弱を占める巨大な市場である（ミネラルウォーターや、スポーツドリンクを含む健康又は機能系飲料等は100万kl）。容器も缶よりペットボトル、それも500mlのものが増えている。茶類の総市場は、1兆3千億円相当であるが、茶ドリンクへの需要が高まっているため茶専門店でも販売されている包装茶の販売量が伸び悩んでおり、経済産業省の統計によるとここ5年で約600店の茶小売業が廃業している（現在、茶専門店は全国に約1万2千店ある）。緑茶の年間消費量も10万1千トンで一人当たり800グラムぐらいいり、総務省によると年間家計平均出費額は6,095円である。

(c)JAM

■MERCOSURがインドとFTAを締結 Mercosur firmó acuerdo de libre comercio con INDIA

1月25日、アルゼンチンも加盟しているメルコスール（南米南部共通市場：亜国、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイ、そして準加盟国としてチリとペルー）とインドが貿易協定を締結した。同国と年間70億ドルの輸出を記録している亜国にとっては大きな刺激とチャンスになりそうだ。今後120日以内に両者間で優遇関税を適用する600から1,200品目のリストを作成することになっており、いずれは自由貿易協定への発展が期待されている。

合意に至った品目に関しては内国同等扱いになり、税金や関税の課税率も国内のものと同率で両者間の取引が促進される。

現在アルゼンチンは、インドに動植物油脂、鉱物、皮、鉄鋼加工品等を輸出しているが、つい最近、インドの経済ミッションが訪れた際には、南米市場への進出のためにインド得意のソフト開発、プログラミングサービスをアルゼンチンの技術者とともに行いたいという提言があった。

インドも中国と同様、食料需要や様々な原料や加工品のニーズが高まっており、アルゼンチ



メルコスールだけに偏る危険性：

経営者でForo Iberomericaというシンクタンクの代表であるリカルド・エステベス氏は、3月7日のラ・ナシオン紙に寄稿し、世界の中で生き抜いて成長するためには、極端に一つだけの限られた仕組みだけに依存することは危険だと主張している。20世紀の半ばまでは、アルゼンチンは世界でも有数の有力国であったが、独自路線で対立と緊張を繰り返しているうちに世界から孤立してしまい、90年代のアメリカとの強調も自国の改革の遅れと放漫財政によって大きなチャンスを失ったと分析している。

ブラジルは南米では大きな存在であるが、アルゼンチンと類似した矛盾や脆さを保持していることでEUのような発展的な共同市場を目指したときには国益同士の対立は避けられず妥協が困難になる可能性もあると懸念を表明している。

地域関係を重視ながらもアメリカ主導とはいえ、米州自由貿易協定ALCAの恩恵を受けられるように柔軟に利便性を考えて、チリのような通商政策を提言している。

亜国は最近中国をはじめ、主な取引関係と「戦略的なパートナーシップ」関係を求めているが、歴史は経済的な依存度が多様なほど、政治や外交の面でも独自路線を歩む余力が増えると教えている。

(c)JAM

ンにとって非常に有利な輸出拡大の機会である。しかしながら、3月に訪れたヨーロッパ連合のラテンアメリカ通商交渉担当官カール・ファルケンバーク氏は、メルコスールの重要性を認めながらも、この構想はまだ空想と思えるような要素が多く実際に域内の関税や防疫規定の統一化があまり進んでいないという。更に共同市場としての機能が十分ではなくEUからの輸出品がブラジルのサントス港から入っても域内で流通する場合、各国で再度二重三重に共通関税が徴収され、メリットがない状況になっていると厳しい指摘を行った。

しかし、アルゼンチン側を代表して、通商関係を担当しているレドラド長官は、域内貿易の単発的な不備を認めながらもメルコスールの紛争仲裁制度の形成も進んでおり、政府調達規制緩和やアルゼンチンとブラジルの為替変動調整制度も機能していると反論し、サービス部門の交渉進展にはEUの過剰な保護で固めている農業政策の改善を求めた。

(c)JAM

■米豪間自由貿易協定の亜への影響

Efectos del Acuerdo Libre Comercio EE.UU.-Australia

2月に米国とオーストラリア間で自由貿易協定が締結され、アメリカは最大の農牧畜産品輸出国でありながら強力な同産品の供給先をパートナーにした。ライバル関係にありながら、オーストラリアが米国に輸出している農牧畜産品の66%は関税ゼロになり（特にオレンジ、マンゴ、ミカン、イチゴ、トマト、切り花、小麦等々）、他9%は4年以内に0%にするという条件内容で合意した。また、肉も現在の37万トンから18年間毎年18.5%の伸びを認め最終的には自由な取引を目指している。乳製品やピーナツ等も段階的に輸出枠を広げていくことで同意している。ワインに関しても11年以内に関税をゼロにし、アメリカからももっと自由に入ってくることになる。

以前からアルゼンチンでも指摘されていることだが、オーストラリアとは国土や産業構造が類似している部分があり、輸出品目もその競争率もすべて同等ではないが共通したものもあることから、今回の米国との協定はアルゼンチンにも少なからず打撃を与える可能性がある。亜国輸出事業協会(CERA)のマンティージャ理事長は懸念を表明しており、早急に米豪協定が亜国に対するインパクトを分析する必要があると政府に要請した。アメリカは大陸全体を前提に主導している米州自由貿易構想があまり進展していないということでこうした域外地域や個別に長期的に利害が一致した国々と関係強化を促進しているのである。

(c)JAM



IMFの中期支援プログラムに基づく第1回マクロ経済レビューに続き、第2回レビューもどうかIMF理事会の承認を得ることができたが、これからは民間債権者との債務返済交渉や構造改革などで確実に成果を上げることが求められよう。アルゼンチンの2003年度マクロ経済指標は大幅に改善した。しかし、これは公的債務の支払い停止、公共料金の引き上げ規制、失業対策助成金などの緊急措置がまだ施されている状態での実績であることを踏まえた上で経済実態を判断する必要がある。経済が早く正常な姿に復し、さらに回復に向かうことが望まれる。

(写真：Cabildo - 1810年自治運動開始革命宣言庁舎)

Informe económico - político proporcionado por **TOKYO RESEARCH INTERNATIONAL** del Grupo Banco Tokyo-Mitsubishi. Elaborado por el Dr. Ken-ichi Shiomi. <http://www.tritld.co.jp/>

「IMFの中期支援プログラムに基づくマクロ経済レビュー」

昨年11月に行われたIMFの中期支援プログラムに基づく第1回マクロ経済レビューは、進展が見られない民間債権者との債務交渉が問題となりIMF理事会の承認が得られない状況が続いたが、ようやく1月28日に承認された。2月には第2回レビューが行われたが、同じような事態が想定され、一方、アルゼンチン側は3月9日に期日を迎えるIMFに対する31億ドルの返済は第2回レビューが承認されない限り返済に応じないとのスタンスを取り、交渉は難航が予想された。さらに、3月4日にはケーラーIMF専務理事が辞任し、従来からアルゼンチンに対し厳しいスタンスを取ってきたクルーガー副専務理事が専務理事を代行することになり注目を集めたが、返済当日ぎりぎりに第2回レビュー承認取得の見通しが立ちアルゼンチンが返済に応じたため、IMFに対する2回目の債務不履行はかろうじて回避された。1月の第1回レビュー承認では理事国のうちイタリア、日本、英国など数カ国が棄権したが、3月22日の理事会に諮られた第2回レビューは全会一致で承認された。但し、承認発表後、クルーガー専務理事代行は「債務再編計画を確実に進めることが国際社会の支援を維持する上で不可欠であり、特に債権者と誠意をもって話し合う姿勢は極めて重要である」とコメントし、牽制する姿勢を見せた。

「対民間公的債務再編交渉の現状」

1月12日、各国の債権者代表が会合を開き、アルゼンチン政府との誠意ある交渉開始と早期の合意形成を目指して「アルゼンチン共和国債権者グローバルコミッティー」を結成し、アルゼンチン政府に対し交渉開始を要請した。尚、米国では一部債権者の債務支払い請求の訴えを受けて、連邦地裁がアルゼンチン政府所有物件に対し処分禁止の命令を出すなどの動きが見られた。一方、アルゼンチン政府は対外債務再編交渉を取

り纏める金融機関としてメリル・リンチ、UBS インベストメント・バンク及びパークレーズ・キャピタルの3社を決定。又、ラバーニャ経済大臣は、5月半ばから6月初旬には債権者に対し最終的な債務再編プロポーザスを行うことを表明した。

「市場動向」

1月下旬から3月初旬までは、米国金利上昇の観測から来るラ米主要通貨の売りやIMFの中期支援プログラムに基づく第2回マクロ経済レビューが承認されるのか不透明な状態で市場は一時ボラタイルな展開となったが、3月9日には同レビューについて承認取得の見通しがつき、同日に期日が到来したIMFに対する31億ドルの返済も滞りなく行われたことを好感し、市場はペソ高、株高基調に戻した。株価は3月19日の終値が1,275.20ペソを記録し最高値を更新、為替は1ドル=2.90ペソを下回る水準で推移している。

「2003年の年間インフレ率3.7%」

国家統計調査院発表によると、2003年の消費者物価年間上昇率は3.7%、卸売物価の上昇率は2.0%に止まった。しかし、貧困層の基準となる基礎食料品の価格については依然として高水準にあり、経済危機発生時点の2001年12月と比較すると上昇率は74.9%となり、その間のインフレ率46.1%を大幅に上回る状況にある。尚、2004年に入り、1月及び2月の消費者物価は前月比+0.4%、+0.1%、卸売物価は前月比-0.3%、+1.3%となっているが、今後公共料金の引き上げなどがどのように影響するかが注目される。

「2003年の工業生産指数16.2%上昇」

国家統計調査院発表によると、2003年の工業生産指数は前年比16.2%の上昇を記録した。部門別では繊維部門(+67.9%)、自動車を除く金属機械部門(+55.9%)、ガラス・セメント・建設資材部門(+27.0%)、出版印刷部門(+22.5%)

などが生産指数の上昇を支えており、特に輸入代替産業を中心とした生産が拡大したことを示している。2004年に入り、1~2月累計の工業生産指数は前年同期比+13.1%となり、引き続き堅調に伸びているが、2月の工場稼働率は67.6%に上昇しており、一部の部門では生産能力の限界に近づきつつあるとの見方が出ている。

「2003年第4四半期の失業率14.5%、12月末の貧困層比率47.8%」

3月11日の国家統計調査院発表によると、2003年第4四半期の失業率は14.5%となり、第3四半期の16.3%から1.8ポイント改善した。しかし、就業者とみなされている失業対策助成金受給者を含めた失業率は19.7%（第3四半期は21.4%）で、又、不完全雇用を含めると30.8%（第3四半期は32.9%）になり、雇用情勢はいまだ厳しい状況にある。一方、2003年12月末の貧困層の比率は47.8%で2003年6月の54.0%から6.2ポイント改善、極貧層の比率も20.5%となり6月の27.7%から7.2ポイント改善したが、いずれもまだ高水準にあり、失業対策及び貧困対策はアルゼンチンにとって依然として大きな課題である。

「2003年の経済成長率8.7%」

3月17日の国家統計調査院発表によると、2003年の国内総生産成長率は8.7%となり、直近の政府予測+8.0%を上回り、過去10年でも最も高い数値を記録した。但し、1999年から2002年の間で約18%のマイナス成長となっていることを勘案すれば2003年の8.7%のプラス成長は未だ回復途上といわざるを得ない。尚、2004年1月の経済活動指数は前月比+1.8%、前年同月比+9.9%であった。

「2003年度国際収支」

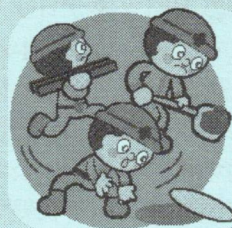
3月22日の国家統計調査院発表によると、2003年の輸出は前年比+14.3%の29,375百万ドルと過去最高を記録したが、一方で、輸入も内需の回復で前年比+54.4%の13,083百万ドル（FOBベース）を計上し、年間の貿易収支は前年比5.5%減の16,292百万ドルとなった。経常収支も7,941百万ドルと前年比17.5%減少したが、資本収支の赤字幅が前年の12,453百万ドルから2,891百万ドルへと大幅に縮小したため、総合収支は前年の4,516百万ドルの赤字から3,581百万ドルの黒字に転換した。

「エネルギー問題」

アルゼンチンは天然ガスの供給不足と、それを発電用原料とする電力事情の悪化でエネルギー不足に陥っており、3月29日には電力各社が電圧を220ボルトから209ボルトに引き下げた。専門家によれば、こうした電圧の引下げは装置

■経済回復あっても雇用拡大効果は期待薄■

Recuperación económica pero poco empleo



国際労働機関ILOの報告によると中南米諸国及びカリブ諸国は低い経済成長率であるため雇用情勢が深刻化している。2003年の平均経済成長率は1.5%で雇用は就業人口の増加とほぼ同率である約2%で失業率は11%であった。ベネズエラが18.9%、ウルグアイが17.4%、そしてアルゼンチンが14.5%とされているが、南米全体で約2千万人近い人が失業している。

亜国も経済危機が発生した直後の2002年は約20%にまで増えたが、失業世帯への支援策によってかなり緩和され、ここ1年で約6%も改善されている。ただ、このままでは財政的にも負担が多すぎることで、不正や政治的利用が話題になっているため、実際の雇用によって吸収されなければ社会不安は解消されないのが現状である。

いずれにしても、ラ米地域全体の特徴は契約関係もない非正規雇用（10人の新規雇用の中7人がブラックで雇用）や不安定な間接雇用が増加していることである。また、社会保障（年金、健康保険、労働保険）への加入率も非常に低い（10人中4人）とされており、こうした労働環境を改善するには法の規制強化（南米諸国では法そのものはかなり整備されているが実行する行政の機能が不十分である）というより競争率強化と両立する経営者の社会的責任が求められている。

今のグローバル化した世界経済では、経済活動が活性化・拡大しても雇用が創出するとは限らず、産業構造にもよるがいかなる業種、職種でも今の企業ニーズに対応できる人材育成（職業訓練）でしか雇用機会は得られない。

アルゼンチンの場合、失業率を緩和するために失業世帯主への支援（雇用保険ではない）を行っているが、こうした給付に対する役務の提供もなく、職業訓練のサポートもないため雇用機会が拡大しても質的な需要と供給間でのミスマッチが発生するのではないかと専門家は警告している。（c）JAM

機械に損傷を与えることはなく、又、一般家庭においても殆ど影響はないものと見ているが、機械作動に遅れが出てくるなど、製造業にとってはマイナスの影響が懸念される。3月30日にはブラジルから一時的に電力供給を受けることになり、電圧の引下げはとりあえず24時間だけの実施に止まった。アルゼンチンのエネルギー不足問題は国内のみならず、チリ、ウルグアイなどの隣国にも影響を及ぼしている。

（しおみ けんいち、当協会理事、東京リサーチインターナショナル研究理事）

■何を何のために輸入するのかという議論

Importaciones que activen la producción

昨年からの経済回復でみられるように、輸出を伸ばすということは生産工程に必要な資本財や中間資財の輸入を増やすことでもある。今年の輸入額も昨年の180ドルを超えるのではないかと亜国輸入業者協会（CIRA）は推計している。主要輸出産業のほとんどは外資系（自動車メーカーをはじめ主な工業事業体は9割が外資）であるが、生産拡大（海外のオーダーに対応するため）にはさらに近代的な設備や機械の入れ替えと、新しい生産技術の導入が欠かせない。アルゼンチンの場合、生産に必要なパーツの35%は輸入品で構成されている（ブラジルは18%なので、それだけ国内で調達できる工業力が存在するという事である）ため、資本財等の整備は輸入に頼っている状態である。

また貿易黒字はそう多くなく、債務を払っていない現状では限られた外貨をどのような輸入品に当てるのかという政策上の選択も必要になってくるのではないかと指摘もあるが、輸入を増やして今まで停滞の道をたどってきた「国産産業」を育成すべきだと主張するものと、もう既に競争力を持っている産業に特化し、そ

こに必要な投資を維持・拡大する方がより良いという説がある。多数の専門家は国策で輸入を選択集中することは今のグローバル経済では困難であり、規制は逆に後を絶たない資金の海外流出を促進してしまう恐れがあると警告している。現実論として債務不履行状態になっている国が輸入を増やし、生産活動を活発化することは容易ではなく、追加の保証（信用）を要求している海外の供給業者に対応できるのは先進国に本社がある外資系企業のみであると関係者は話している。

(c)JAM

◆メモ：CIRAによると、ここ50年間の輸入を品目別でみると75%は生産活動に当てられており（機械、原料、設備、農業用化学品、中間財、農業用殺虫剤・除草剤、ゴム、鉄等）残りの25%のみが一般消費向けだったと分析している（70年代後半や90年代には異常なペースで市場は輸入品で埋まってしまったという印象が強いが、それほどでもなかったのである）。2003/4の輸入をみても一般消費用の品目は1割にも満たない。2003年中、もっとも輸入されたのは、ミニバス（現地ではコンビというが、これが2億8千万ドル）、電力が約2億ドル、自動車部品が1億7千万ドル、トラクター用のブレーキ部品が1億5千万ドル、穀物収穫機械が1億4千万ドル、携帯電話1億ドル、ゴムタイヤ8千万ドル等である。

■中国を大きなチャンスとして捉えようとしているアルゼンチン

Para Argentina el crecimiento galopante de China es una gran oportunidad

中国は世界の工業製品の製造拠点であり、目覚ましい経済発展過程で世界中の天然資源、エネルギー、鉱物を必要としている。この傾向は年間15%増で維持されると見られており、大きな問題が発生しなければ後5~6年は続くということである。この動きで日本が輸入している第一次産品の価格も高騰しはじめており、国内各産業及び消費者への影響がでてくる可能性も否定できないが、中国の経済は日本とも密接に関係している。

ザ・エコノミストによると、中国は去年だけでも、世界で消費されている鉄の36%、セメントの50%を使用しており、今後も鉱物資源等のニーズは高まると指摘している。

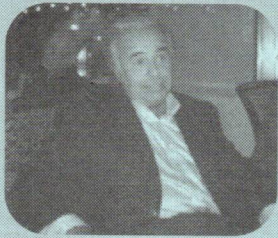
中国の貿易拡大は外国からの投資によるものが多く、2003年の統計によると外資系企業の存在は製造業全体の23%、税収の18%、そして輸出の48%にも及んでいる（輸出入は02年比30%増である）ということである。

中国の国内消費能力及び所得水準も高まっている。確かに沿岸地域の一般所得も上がっている（月収600ドルから1,200ドル）が、今後10年で大陸奥地から3億人近くの労働力が都市に流れ込み新たな消費市場が形成されるため様々なモノとサービスを求めるようになる（食料、住宅、インフラ等）。中国は広大な面積（領土）を所有しているとはいえ、穀物や野菜栽培に適した耕地や水資源は13億人すべてに対応できないと見られており、アルゼンチンのように天然資源が豊富な国には大きなチャンスなのである。

亜国からみて中国は4番目の輸出先であるが、数年後ブラジルを抜いて第1位になると予測されている。ここ7年間で3倍になっているが、昨年だけでも大豆や他の穀物、食料関係だけでも100%増加である。

こうした状況を見る限り、国や共通した利害関係で構成している国々の地域（例：メルコスール）は、いかに自分たちの比較優位性や競争率の高い分野を開拓・発展させるかにかかっており、そうした分野のみにしか投資のチャンスはないと自覚、認識していかなければならないのかも知れない。今アルゼンチンが農畜食料関係分野に集中して投資していることは「集中と選択」の現れである。

(編集部(c)JAM)



2月末から約10日間の日程でブエノスアイレスに次ぐ第二の州コルドバの知事ホセマヌエル・デラソタ氏が外務省招聘プログラムで初めて来日した。コルドバ州は、アルゼンチンの独立前からイエス会によって大学などが設置されており、現在は工業品関連と食品産業がもっとも活発であると共に、パンパ高原の一部から山岳地帯に至るまで観光名所が多いということ知られている。

滞在中外務省のスケジュールによって、日本の政治家や各関係機関の高官と懇談し有意義な意見交換を行ったとされているが、いかなる機会にも今のアルゼンチンの政治・経済情勢を説明すると共に経済の活性化には日本のもっと積極的な民間投資が必要だと呼びかけた。阿部正俊外務副大臣主催の夕食会でデラソタ州知事は、「アルゼンチンはこれ以上債務額を増やしてしまう借金は必要なく、むしろ日本にも利益になる民間企業の投資を必要としています」と述べたという。その他、アルゼンチンの研究を専門にしている神戸大学の松下洋教授（日本アルゼンチン協会の理事）とも意見交換し、東京では上智大学を訪問しウィリアム・クリエ学長及びイペロアメリカ研究所の今井圭子所長と懇談した（その際、コルドバ・カトリック大学の交換留学生ハビエル・ヘルボン君も参加した）。

コルドバの貿易促進を管轄しているProCordobaには、JICA派遣の専門家が活動しているが、州内の中小企業の輸出能力を高めるために指導している。JICAを表敬訪問した際は、役員及び中南米部長にこのプログラムに謝意を述べると共に日本への輸出拡大を期待している旨伝えた。

州知事は愛知県のトヨタ自動車工場をも視察し、その後京都、広島も訪れている。そして最後に東京在住のアルゼンチン人数人と懇談し政治の話に花を咲かせた（この非公式の会合に当協会のアルベルト松本理事も参加した）。この際、日本人のアルゼンチン・folkloreへの関心の高さに驚いており、コスキン・全国folklore大会に毎回日本のグループが参加していることにとっても嬉しいと話し、今年の大会には在亜永井大使も出席したとコメントしていた。

日本での滞在中、毎日のように同行していた秘書官が州政府のホームページにその日の会合の概要や写真を送ってアップデートしていた。

コルドバはアルゼンチン国内で最も観光客が訪れる州の一つでありこの夏休みだけでも350万人が訪れている。folkloreファンには、コスキンだけではなく最近人気上昇中のヘスマリア・folklore & 馬の慣らし技大会（Fiesta Nacional del Folklore y la Doma）が注目を集めている（1月9日～18日開催 <http://www.festival.org.ar/>）。また、州北東部のカラムチャ湖近くのヘネラル・ベルグラーノではドイツ人移民が原点である「全国ビール祭り Fiesta Nacional de la Cerveza」も毎年10月に開催されている（<http://www.elsitiodelavilla.com/municipio/fiestas/cerveza.htm>）。



(c)JAM

■コンゴとハイチにウルグアイと合同派遣（国連の平和維持活動）

Tropas conjuntas a Congo y Haiti

長年紛争状態が続いたコンゴで、2002年国内の反政府勢力及び周辺諸国と和平協定が締結されたため、現在、多数国の軍隊が国連の平和維持活動を行っている。隣国のウルグアイは既に派遣しているが、アルゼンチンも年末か来年のはじめに数百人の兵士を送ることで調整している。キルチネル政権はこのことを既に政治決定しており、両国の国防省間での調整を急いでいる。

また、アリストイド政権が崩壊したハイチにも数カ月以内にウルグアイと合同で平和維持軍を派遣することを閣議決定し、議会の承認を待っている。現在の混乱状況が米軍とフランス軍によってある程度収まれば第2ステップの部隊として陸軍と海兵隊200名を派遣する用意があると3月のはじめにパンプロ国防相は発表した。ブラジルも賛同している派遣であり、ハイチに対する南米南部地域としての政治的対応として見られており、先月アメリカの軍参謀本部長が来亜された時にもこのことが話し合われた。

以前から、アルゼンチンはキプロス共和国にかなりの隊員（UNFICYPに所属）を派遣しており、現在も数百人が6カ月毎任務に付いている。その他、コンボ（UNMIK）、東ティモール（UNMISET）、ボスニアヘルツェゴビナ（SFOR）、イラク及びクウェート等に派遣してきた。



(c)JAM

<http://www.jef3op.ejercito.mil.ar/website/Departamentos/oomp/inicio.htm>

■ExpoChacra農牧畜展示会：農業機械等販売増

アルゼンチンは今19世紀末以来の農業ブームである。中国やインド等の経済発展に伴う食料需要が大豆等の輸出増に現れているが、この傾向は今後も続くと思われる。多国籍アグリビジネス企業はアルゼンチンでの生産・輸出増を目指してかなりの設備投資を行っており、歪んだ輸出税で課税されているにも関わらず穀物関連の農業生産者は非常に潤っている状態である。こうしたことを反映してか、サンタフェ州南部で行われた「農牧蓄フェア-EXPOCHACRA」は大盛況だった。

農業セクターは90年代にかなりの設備投資やインフラ整備、新品種種子の開発、バイオテクノロジーの導入等を行ったことで世界でもトップレベルの競争率を有しているが、ここ数年の大豆等の食糧需要増加によって生産者は生産拡大と生産性向上に力を注いでいる。

今回のフェアでは、農牧蓄事業に関係する機械メーカー、種子開発業者、中間資材やサービス供給業者等600社がブースで各商品やサービスを展示・紹介した。

今年の特徴は、取引の問い合わせより実際ビジネスの成立と銀行ブースへの融資相談が多かったことである。数日間でトラクター20数台、収穫機械、肥料、種、穀物保存用の特別袋等販売額は約5千万ペソに昇り（今後商談の見込契約を入れると2億ペソを超えると推測）、3日間（3月9日～12日）で74,000人が訪れ農業経営セミナーや各分科会の勉強会には570人の若い人が参加したと伝えられている。来年も同時期に行われる。



(c)JAM
<http://www.expochacra.com/>

■民主主義は確立したが経済社会問題は未解決

Consolidación de la democracia



昨年12月でアルゼンチンは、1983年に誕生したアルフォンシン政権から20年目の民主主義期間を迎えた。政治的な困難も多々あったが、国民の投票によって政権は交代し史上民主政治が最も継続した期間である。

1912年、国民に投票権を与えたサエンペリャ法は、すべての国民の政治参加を可能にするが1930年のクーデター以来軍事政権が数年毎に起き不安定な政治体制が続いた。

20年間の民主主義は大きな功績を残しているが、以前からの経済社会問題はあまり解決しておらず逆に所得格差の拡大などで悪化しているとも言える。一人当たりの所得という観点からは、1983年3,544ドルだったのが2003年には3,439ドルに後退しており、貧困層の人口割合は83年に16%だったのが、今は51%までに拡大してしまっている。他の南米諸国も同じような時期に民主主義を回復しているが、現状は所得格差の著しい拡大である。スペイン語圏でスペインだけが、78年の新憲法の下そしてその後のEU加盟を果たすことによって、民主主義という政治体制と経済制度を両立することに成功し、20数年間で所得を5倍（年間所得2万ドル）にし、貧困層は15%から3%までに改善することができた。

スペインと比較することは地理的歴史的な違いがあるため無理があるが、政治的な選択をするには、かなり参考になる部分もある。それは、市場統合への選択（メルコスールだけでは、経済を活性化するには足らず、やはりアルゼンチンよりもっと購買力のある市場を見る必要がある。それは、アメリカをはじめ、ヨーロッパや今後中国等である）という観点と国内の経済発展モデルに対しての政治的コンセンサス構築についてである。

アルゼンチンの場合、中道左派のアルフォンシンも中道右派のメネムにも共通したことがある：大きな改革を行うための政治的“コンセンサス”があったにもかかわらず、数少ないタイミングを逃し財政運営に対する規律を軽視し続けたことで対外債務に依存したことである。

今までどの政権もある程度合理的で筋の通った政策提言はしてきたが、著名な歴史学者ルイス・ロメロ氏は、“国の機能が低下（行政制度の低落現象）しているため、いかなる政策も実現

しない、したとしても中途半端又は逆効果になってしまっていることもある。この低迷は70年代から悪化しており、今は政策を実施することも、実施後のチェック機能も非常に衰えており、腐敗と不正が充満してしまっているのである。民主主義のための制度構築ではなく、その時々（軍政も含む）の政権、時にはカリスマ性の強い指導者のための制度であったため、国民のための正常な及び公正な行政ではなくなってしまったのである。国の機関はイデオロギーというより与党の欲望や利害関係の取引材料になってしまい、あまりにも政党や政治指導者の政治活動と繋がってしまっているのだ”と厳しい指摘を行っている。

同氏の分析を引用すると確かに今のアルゼンチンでは、時代やニーズに対応でき、かつ信頼できる制度構築が急務であり、単発的な汚職追放や不正の取り締まり強化だけでは根本的な問題を解決できる状態ではない。

現政権は、こうしたことも視野に入れて大改革をしようとしているのか、それとも限られた政治力しかないため権力を集中するため多少強引とも見える手法で政権を固めようとしているのかまだ把握することができない。政治及び行政改革には、いかなる国でも政治的コンセンサスと実行力（権力）が必要であるため、その過程にいてのではないかとキルチネル政権への期待も高い。もし、今回の制度的危機をチャンスとして捉え、国民の痛みを新しいアルゼンチンのために活かすことができれば、ここ数年の苦難は報われ、将来への希望も見えてくる。そして何より大事なのが民主主義という政治体制が経済的にも国民を豊かにするということである。

(C)JAM

■ここ20年間、軍部は何をしていたのか

Reformas realizadas en el sector castrense

1930年から76年までの間、軍がクーデターによって政権を奪ったのは6回であるが、政治基盤が弱り、民主政治に難題を押しつけたり、強力な圧力や武力行使を行った事例を数えると40数回の登場になる。他の南米諸国と同様、クーデターにはいつも民間の政治勢力（野党や保守勢力の一部）も深く関わっており、メディアの誘導によって市民の支持もかなり得ていたということも事実である。民主政権が不安定になったり、経済問題や治安があまりにも悪化したりすると国民そのものがあまり抵抗することなく“混乱を鎮圧するためと秩序と規律を保つために”軍の介入を容認してきた側面もある。

ただ、軍政権によっても制度そのものの腐敗構造や運営機能は変わらず、逆にわずかな透明度さえ損なわれ、大規模プロジェクト（公共事業）での公金横領事案はあまりもひどかったということが、後から分かってきたのである。軍は、殆どの場合、無力な民主政権の「代替政権」として登場してきたが、結果的には力によって憲法や法体系を無視して、数々の人権問題を起こし、疲労していた国の制度を軍上層部の私利私欲のために利用してきたというイメージだけが強く残ってしまっている。70年代、非道なゲリラの武力活動が多く多くの市民の命を奪い始めた頃は、たしかに国民は軍の積極的な役割を求めたが、治安の回復とともに経済問題（購買力を蝕む慢性的インフレ等）の解決も期待していた国民は結果的に裏切られてしまった。1982年のマルビナス戦争敗北を機に軍という存在は社会から抹消されてしまったのである。

多少行き過ぎた弾圧的な措置（軍上層部の責任追及、予算の極限的削減策、戦争敗北のトラウマ、社会からの孤立等）によって軍という機関そのものが窮地に追い込まれたのである。1984年にはラ・タブラダ反乱が起き鎮圧には多くの犠牲がでたが、この事件にはいろいろな背景があったとはいえ、もっとも国民が動揺したのは将校や下士官の中にはマルビナス戦争で

戦った英雄が多数いたことである。

その後も不安定な状況が続き、軍のあり方や組織の見直し（組織の縮小と人事のリストラ、兵役の廃止）、軍の国内での役割、国連平和維持軍での海外任務という試みへの参加、将校教育と職業軍人の訓練内容等が議論されてきたが、ひとつ一つ今までのことを教訓にして乗り越えてきたと言える。このプロセスに不満で多くの有能な人材の除隊や離脱もあったが、今は、軍の役割は確立し文民統制の下でしか行動しないということが法律的にも意識的にも保証されていると言える。

(c)JAM



写真：旧ユーゴ国境付近で警備する亜国軍兵士（国連の平和維持活動にて）

■判事の所得も課税？

¿Los jueces también tendrán que pagar ganancias?

このタイトルを見る限り、アルゼンチンでは裁判官たちの給与は課税されていないと思われるが、実は憲法上の規定とその解釈で例外的に連邦及び州判事の所得は完全に非課税扱いになっている。しかし今、政府のイニシアチブによって議会上下両院で激しい議論がかわされ、審議もかなり進み、課税の方向に動いているようだ。

憲法第110条は、判事の給与はいかなる理由があっても削減してはならないと規定されているため、これを厳密に適応して税金を納める必要もないと拡大解釈している。一部の判事はいかなる政府又は政権の政治的関与も阻止し、司法の中立を保つためとこの解釈を支持しているが、ここ数年判事の汚職スキャンダルが相次いだため国民はこの根拠にあまり納得していないのが実状である。

現在、連邦判事が900名、州判事が7,000名在職しており、すべての裁判官から所得税を徴収すれば約1億ペソの税収アップになるという計算である。720億ペソという税収からみれば微々たる金額であるが、政府が特例で失業者世帯主に対して支給している給付額（予算）の3分の1に当たり、国民が求めている所得格差の是正という観点から、政治的なインパクトも大きい（ペロン党のミゲル・ピチェト上院議員の主張）。

1994年にこの例外措置を規定していた法律は破棄されており、税法の識者は税務当局が課税の手続きを取り、通知するだけで十分だという見方も強まっていることで、問題はどこまで課税するのか、給与だけにとどめて諸手当を非課税にするのかという「政治的決着」をねらう議

■選んだ政治家に不満

Arrepentidos de haber votado al candidato favorito

「投票しても後から後悔する」というアルゼンチン人が増えている。

昨年、大統領選挙後にダレシオ&イロルコンサルタントが約2千人を対象に行ったアンケート調査によると、6割は選挙に行くことを楽しみにしているが、選挙管理委員会の命令で投票所での選挙管理任務は案外苦痛と思っている人が多い（約7割）。誰に投票するかを63%は配偶者と、45%が両親と、そして28%が子供たちと話し合っていて決めていると回答しているため、最後まで誰に一票を投じるかにかなり悩んでいる様子がうかがえる。一人で投票所に行くのは4割で後は家族と共に行っている。

また、35%は最後の一週間で誰に投票するかを決めているが、56%はその前の選挙で選んだ政治家にフラストレーションを抱えており（当選者に



対する期待はずれ)、7割近くが投票した人たちが間違っていたと思っていると答えている。国民の選択は正しいという概念は通じないようである。

論も議会で行われている。

いずれにしても、現時点では判事会（組合的な役割を果たしている団体）は課税に真っ向から反対しており、課税が法制化されても保全処分を申し立て最高裁まで上告するとにらみを利かしている。

◇メモ：1932年に所得課税法が制定された際にいかなる例外も認めないとされたが、ロドルフォメディーナという判事が国を相手取って訴え、36年に最高裁は原告の主張を認めた経緯がある。アメリカでも同じ議論があったが、1939年から判事の所得も課税されている。労働法の専門家も以前からこの非課税例外措置は違憲であると論じており、1994年には、この例外を規定していた政令を破棄した。しかし、最高裁はまた、この政令を司法府のみに無効とした。(c)JAM

◇少ない予算でのやりくり：

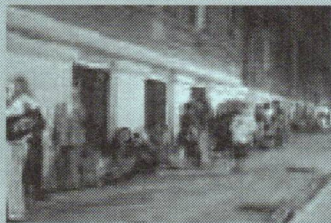
La JUSTICIA con muy poco presupuesto

判事の高い汚職率、裁判の実施があまりにも遅いという実態、政治的な事件への連邦判事に対する疑惑、そして最高裁人事の政治問題化等が司法府全体に対する国民の不信を招いている。また、組織的にも人的にも慢性的な財源不足であるため裁判所というものは市民や各当事者の権利主張や不公平感の是正にあまり役立っていないというイメージが強いようである。

司法行政のスムーズな運営と機能強化に司法府は毎年11億ペソの予算を要求しているが、7億ペソしか当たえられていない。その結果インフラ整備も不十分であり、一部の建物はかなりの老朽化で最低限の作業もできず、人材の訓練や研修などは完全に後回しになっている状態である。

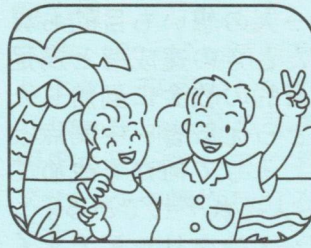
また、司法キャリアを目指している法学部卒の新入職員は、入所数年間はほとんど無報酬に近い状態であり、今も1,500人が正式な任命なしで働いている。扱う事件によって、担当判事にスタッフやパソコン、OA機等が与えられるが、すべてその時々の政権が政治的に優先課題であるか否かと判断するかによって左右されることが多いという。

州レベルでも状況は変わらず、最も豊かなブエノスアイレスでも、州最高裁の事件になると判決順番を決定するための抽選でさえ二年はかかるそう、一部の政府関係者が提言しているように受付時間拡大や1月の司法休暇短縮だけでは司法全体の解決にはほど遠いと言わざるを得ない。(c)JAM



2002年、銀行封鎖に対する保全措置を請求する市民。ブエノスアイレス市裁判所前のビルで早朝から行列。

■国内外のハネムーン行き先：ポイントは二人だけの「空間」 Destinos de Luna de Miel



昔はハネムーンといえばアルゼンチンのスイスとも呼ばれているバリロチェだったが、今は二人だけで過ごせる湖に沿ったログハウスとか、静かな場所が

好まれている。同じバリロチェでも周辺のサンマルティン・デロス・アンデスやビジャ・ラアンゴストウーラ等の隠れ家的なスポットが人気を集めている。もちろん、イグアスの滝も人気を保ってはいるが、神秘的で二人だけの「空間」を求めるカップルが増えている。

海外行きのトップはブラジル北東部の美しいパラダイスのようなビーチである。予算にもよるが、後はイタリアのヴェネッチャ、フランスやギリシア等が入っている。ニューヨークで買い物をしてカナダのナイアガラの滝コースというのも相変わらず人気があるが、変わったエキゾチックな内容としては、南アフリカ、カリブ海（主にキューバやジャマイカ）、ポリネシア（タヒチ、ボラボラ）等である。南アフリカではサファリ体験もあるが、インド洋に面した島に泊まるのがちょっとしたブームになっている。

ただ、比較的近場にも神秘的で変わったところはある。一つは、コロンビアのバリチャラというところであるが、遺跡のように石だけで作られたユニークな街である。もうひとつは、チリのアタカマ砂漠にある「エクスプローラ」という高級ホテルで、標高2400メートルで特別な環境（周囲には何も無い山岳砂漠地帯）とムードで、一流のワインと多国籍料理が堪能できる。

◇参考：

●Barilocheは、飛行機で7日間、周辺のサンマルティンデロスアンデス等のツアーパックだと宿泊費込みで650ペソである（高速長距離バスだと470ペソ）。

●ブラジル北東部のビーチPipaやNatalは、10日間で飛行機代及び宿泊費込みで700ドル。その他海外は一般的に1000ドルから1500ドルぐらいであるが、ホテルの星数やシーズンにもよる（平均2千ドル）。ブラジルには新婚カップル用のパッケージが多く、ホテルの施設も充実したサービス内容もすべてカップルがゆったり甘い雰囲気を楽しめるようにセッティングしていると好評である。

■信者でなくとも巡礼を体験してみては

La hermosa experiencia de peregrinar

アルゼンチンも他の南米諸国と同様にカトリック教徒の国である。当然信者にとって重要な行事（洗礼や聖体拝領等諸行事から日曜のミサに至る）はいくつかあるが、もっとも感動的

で信者でなくとも心が洗われるのはやはり巡礼 (peregrinación)である。

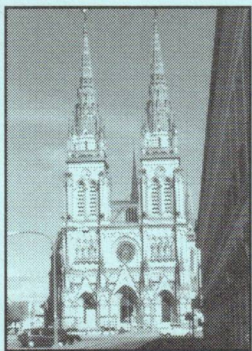
団体で行くこともあれば、家族と又は一人でいくこともある。ひとり一人の想いも目的も異なるので長い距離を終えたときの達成感と満足感とは特別なものになる。目的の教会に到着したことだけをゴールとしてとらえる者、中間点として願いを新たにす者、そして何かを改めて新しい道を歩み始める者、人それぞれである。

日本では、テレビドキュメンタリー等でよく紹介されているのがスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼だが、亜国でもいくつかの巡礼コースがあり、信者でなくとも体験する価値は十分にある。司教評議会によると全国には70カ所あるというが、最もメジャーなコースは、ブエノスアイレス州のルハンとサンニコラス、コリエンデス州のビルヘン・デ・イタティー、サルタのヌエストラ・セニョーラ・デロス・ミラグロス、タンディル (ブ州の南西部)のモンテ・カルバリオ等 (殆どが聖マリアを祀るもの)である。

4月8日から11日の「聖週間 Semana Santa」には当然ながら多くの信者が訪れるが、日本のお祭りとも類似している。神社やお寺へのお参り、清め、願かけに、行き先の観光名所見学や郷土料理にも興味がいくのと同じように、アルゼンチンでも屋台も多く、にぎやかな雰囲気を楽しむことができる。

巡礼を団体でスタートしても歩くペースが皆違うので一人になることもあるが、必ず新たな出会いもあり、やさしく声をかけてくれる。

ブエノスアイレスから西へ70キロ行くと有名なルハン大聖堂 (Basílica de Luján)があるが、ここには毎年6百万人もの巡礼者が訪れる。1887年から1935年に建築されたもので、フランスパリにあるゴシックスタイルのノートルダム寺院を参考にしたものである。現在、一部修復工事が行われているが、堂内には入ることができ、その周辺の観光インフラも充実している (ホテル、キャンプ施設、レストラン、博物館等)。



通常、ブエノスアイレスのリニエルスというところから午後3時頃に出発し、次の日の夜明けに到着するのを目的とするが (ほぼ14~16時間)、自分のペースにあわせてあまり無理のない「巡礼」でないと足の痛みは相当なものになる。9月~11月の間は一定距離毎

に医療班もいるが、シーズン外には自分自身が頼りである。グループで行く場合は気の合う4~5人で行くのが良いが、あまり焦らず時間をかけ

ていくことが肝要である。治安上のこともあって女性だけで行くのはあまり望ましくなく、信頼できる男性友人又は地域の教会の「青年部」の誰かと行くことが良い。また、荷物もできるだけ軽くし、リュックに必需品だけを入れて夜の気温変化に対応できる上着も必要である。お金も必要最低限で高価なものを付着しないことである。一部バスで行くということも一つの選択である。

到着数キロ前から見ると大聖堂の十字架、教会に入った瞬間は誰もが感動する、ものであり、巡礼に参加する理由があまりなくとも目的地に到着したときの祈りは大きな意義があるのである。 (c)JAM

Luján大聖堂 <http://www.basilicadelujan.org.ar/>

■SALTA サルタ ~雲に一番近い町~ 特集記事：荻村 昌代

サルタは首都ブエノス・アイレスから約1600kmのアルゼンチン北部に位置します。地名の語源はアイマラ語で「とても美しい」を意味する。コロニアル時代の建物、伝統的な郷土料理、フォルクローレの町。そして有名な観光列車「雲の上列車」は、世界各国からの観光客を魅了しています。今回は実際に旅した際の旅行記をご紹介します。

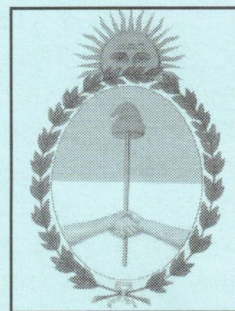
雲の上列車 (El Tren a las Nubes) 紀行

朝7時5分、外はまだ薄暗い中、海拔1187mのサルタ州の州都サルタ市から出発。駅にはコカの葉、ガム、フィルムなどを売る現地の人々が

■3月12日：「亜国紋章の日」

12 de Marzo- DIA DEL ESCUDO NACIONAL

3月12日はアルゼンチン国紋章の日である。これはスペインからの自治を決意した革命の1810年頃から公文書等で使用されるようになるのだが、実際は、1813年になってから当時の政府であった全国評議会が政令に基づいて正式に制定したのである。しかしその後各政権が細かな改正を行ったため、原形とその趣旨を維持するために1944年4月24日、法律と法規則によって今の形になったのである。



握手している部分は当時のリオ・デラプラタ領土の団結を意味し、赤い帽子は当時自由の象徴で、短い槍は必要とあれば武器によって自由を守るといった意味が込められている。太陽はアルゼンチンという新しい国を表しており、ローリエは勝利の意味である (独立戦争で独立を決定づけた戦闘を意識したと言われている)。そして、ブルーと白 (銀色) はアルゼンチンの国としてスタートした時点から自然に現れている色であり、国旗やリボンにも採用されているのである。

■4月2日：「マルビーナス帰還兵の日」

2 de Abril-DIA DEL VETERANO DE GUERRA

アルゼンチンで4月2日といえば誰もが「マルビーナス戦争」のことを思い浮かべる。22年前、1世紀にもわたってイギリスに対して主張してきた領土権を軍の極秘作戦によって奪回した記念日なのである。軍事作戦としては勝利を収め、低迷状態にあった軍事政権も息を吹き返したように国民の団結を訴えた。国民はその呼びかけに応え多くの若者が戦場（マリビーナス諸島（英はフォークランドと称している））やその付近に送られ任務に付いた。戦争は亜国軍の降伏と全面撤退で6月14日に終結したが、649名が戦死し1500人以上負傷した。



こうした兵士たちと島に動員された1万2千人の隊員の活躍を忘れないために1992年9月30日に採択された法律第24.130号によって4月2日を「マリビーナス戦争兵士の日」として定めた。兵士という意味は将校や下士官も含むとされており、戻れなかった者の英霊を弔うだけではなく今社会で普通の生活をしている元兵士への敬意も込められている。

帰還してから精神上の障害で社会に復帰できなくなったり社会の中でうまく共存出来なくなった者もいるが（一時的に自殺者が増え百数十人にも上っているという推定もある）、アルゼンチン政府はその民政になってから勲章や表彰を与え、かなり充実した社会保障制度が構築された（遺族だけではなく帰還兵にも恩給を与え、低金利での住宅ローン、大学授業料の一部又は全額免除、普通公務員採用の優遇措置等）。(c)JAM

集まっています。列車は全席指定、10両編成で512人乗れるそうです。各車両にガイドさんが1名付きます。時々流れる車内放送は、スペイン語の他、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、英語。ヨーロッパからの観光客が多く見受けられます。車両の1つは「郵便局車両」で、標高4000mを通る列車等の絵葉書、封筒、きれいな切手も売っていて、投函ポストまであります。スナックや飲物を売る売店車両や食堂車もあります。

列車はスイッチバックを繰り返しながら上へ上へと進んで行きます。29の橋、21のトンネル、2箇所のジグザグを通ります。最初のジグザグ地点では、54mの高さをたった900mの距離を走行し上ります。標高2000m位までは車窓からサボテンが沢山見えますが、それ以降は草が見えるだけになりました。時々ワゴン車で上まで目指す人を見かけます。列車と自動車両方で手を振り合っています。

停車する駅に人影はありません。高度が上がるにつれ、遠くに白っぽい動物を見かけますが、アンデス域で有名なリャマのようです。

San Antonio de los Cobres駅に停車。外は風が強くて、空気が乾燥しています。標高3774m、富士山の頂上と同じ位の標高のこの地域に4000人も人が住んでいるというのには驚きます。多くのインディオ系の人々も子供も一手に手にリャマの毛で手作りしたと思われるセーターやチョッキ、靴下、帽子、ショール、人形、石で作った彫刻等の民芸品を持って現れてきました。チョッキ15ドル、人形1ドル、布袋2枚18ド

■JICA日系人社会青年ボランティア帰国 Dos años de experiencia en la ARGENTINA de los jóvenes voluntarios de JICA

約2年間、ブエノスアイレスの日系団体連合会FANAで団体事務の任務に付いていた杉下由紀子さんが帰国した。他、3名も元気な姿で帰国したようだが、派遣先のコルドバ日本語学校からの誘いで今度は一個人として再度アルゼンチンに行く日本語教師もいるという話を聞いた。

杉下由紀子さんは、南山大学イスパニヤ学科でスペイン語を学び、論文を書く際には松下マルタ先生（当協会松下洋理事の奥様）の指導を受けたという。先生との出会いがアルゼンチンという遠い国への関心を高めたのだが、東京外語大での修士課程ではメキシコの女性労働問題について研究をし2年間メキシコで滞在した。その後、約3年間にわたって在京コスタリカ大使館、ドミニカ共和国大使館で勤務したが2001年末にJICAの「日系人社会青年ボランティア」プログラムに応募し合格したのである。2002年2月から今年の3月までブエノスアイレスで生活しFANAで勤務したのだが、本人はとても良い体験ができてプラスの部分が多かったと話してくれた。多くの人と出会いとアルゼンチンで得た「生きるためのノウハウと智慧」が大きな財産になったようである。さっそく今までの人脈を活用して、今月から慶応大学法学部（日吉キャンパス）と東京海洋大学で第二外国語として設けられているスペイン語講座で非常勤講師として働いている。慶応大学では、教授のすすめで「アルゼンチンの社会と文化」というテーマで講義を行うことになった。

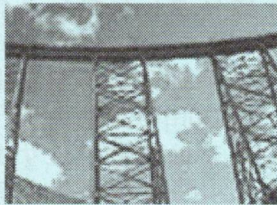
杉下さんはいずれもっと具体的にスペインや中南米諸国と関係している仕事に就きたいと考えているようだが、ここ一年間はアルゼンチンでの経験をきちんと消化しながら自分が実際進みたい又は進める道を模索したいと話している。



ルを買いました。

11時頃から食堂車が開きました。予約をした人は指定された時刻に食堂車へ行きます。ランチは11ドル。グリルチキン、フライドポテト、ミックスサラダ、パン、サルタ風エンパナーダ2個、にコーヒー（又は紅茶）とお菓子が付くフルコース。結構美味しかったです。

最高地点の鉄橋は標高4220m。その手前で停車し外に出ました。高地なので寒い上、風が強いのです。ここでもインディオ系の住民達が民芸品を売りにまた集まってきました。



列車には大きな酸素ボンベも搭載されています。4000mを超えると普通の人は頭が痛くなってくるので、酸素を補給したい時はボンベのある車両へ行き、数分吸わせてもらうわけです。実はこの列車には医師も看護師も乗務しています。

最終地点から列車は往路を下っていきます。乗客が退屈しないようにと、民族衣装をまとったフォルクロレのグループ達が度々車両を回って演奏してくれます。

サルタ駅に戻ったのは夜中の0時。定刻は22時だそうですが遅れました。長い一日でした。サルタの自然風景を楽しむこの列車の旅は、一度参加してみる価値はあると思います。こんなにも乾燥し薄い空気の高地にも、列車が通り、駅があり、そして人々が住んでいて観光客相手の商業活動が営まれていました。南米のパリと称されるブエノス・アイレスとは180度異なるこの地も、同じアルゼンチンの町の一つでした。

●雲の上列車インフォメーション

出発：07:00 帰着：22:00
所要時間：約15時間 走行距離：219km
予約：1ヶ月前まで

サルタの代表的な郷土料理 サルタに滞在したら是非お試しあれ！

*Salteña サルタ風エンパナーダ

大きめに切ったひき肉、ジャガイモ、たまねぎ、ゆで卵、干しブドウ、などをコショウや産物であるクミンで味付けしたジューシーなエンパナーダ。サルタでは30年以上前から「サルターニャ・コンテスト」が行われている。

*Humitas ウミータ

サルタを代表する産物とうもろこしで作ったパンケーキのようなもの。挽いたとうもろこしにバジル、牛やヤギのチーズ、豚あぶら、砂糖、唐辛子などを混ぜ、とうもろこしの皮に生地を包みゆでる。非常に甘くして食べる人もいる。

*Locro ロクロ

主に冬に食べるシチュー。とうもろこし、黄

色いかぼちゃ、インゲンマメ、牛肉、豚骨等を煮込んだもの。日本人の口に良く合う。レストランでも安く食べられ、身体の温まる食べ物。

*Tamales Salteñas サルタ風タマル

とうもろこしの粉の生地にはひき肉や野菜、調味料、ゆで卵などを混ぜてとうもろこしの皮に包んでゆでたもの。(C)OGIMURA M.

■お役立ちサイト紹介

サルタ州政府観光局

<http://www.turismosalta.gov.ar/index.asp>

雲の上列車

<http://www.trenubes.com.ar/>

アルゼンチン政府観光局

<http://www.sectur.gov.ar/eng/menu.htm>

ラ・ベロス・トゥリズム

<http://www.lavelozturismo.com.ar/>

■JICA日系人研修員南米から来日

JICA国際協力機構は毎年中南米諸国日系人研修員を百数十人受け入れているが、今年度の第一陣が4月5日来日した。37名の内アルゼンチンからは生垣リリアーナ（23歳）さん一人だけであった。札幌の幼児保育の専門学校「谷内学園」で2年にわたって長期の研修を受けることになっている。

日系人研修員たちは各地の研修機関に移動する前にJICA横浜国際センターで日本社会全般に対してオリエンテーションを3日間受けるのだが、8日の正午、天皇・皇后両陛下が同センターの「海外移住資料館」を視察された際に日系人研修生らとも懇談されたので、リリアーナさんもその場において「とても緊張したが、一生の思い出になる出来事だった」と話していた。

同月12日には江原イグナシオさん（27歳）が同じプログラムで来日、同氏は宮崎大学農学部で豚肉の品質管理について来年の7月まで（1年3カ月）研修を受けることになっている。

(社)日本アルゼンチン協会 会員募集

日本とアルゼンチンに関係する情報を得る。文化交流の主役になり、イベントに参加する。互いの理解を深め、友好関係を育てる。

正会員：年会費 10,000円 Socio pleno
賛助会員：年会費 5,000円 Socio colaborador
学生会員：年会費 3,000円 Socio estudiante
法人会員：年会費 一口 30,000円 Corporativo

Tel: 03-3501-4684 E-mail: argentina@nifty.com

支払方法：郵便振替又は銀行振込

○郵便振替：0120-6-581381

社団法人日本アルゼンチン協会

○銀行振込：東京三菱銀行 新橋支店

普通預金 0234478

社団法人日本アルゼンチン協会

●会費未納の会員には再三の催促にもかかわらず支払を
実行しない場合は一定期間が過ぎた段階で脱会手続きを
取らせていただきます。

事務局：03-3501-4684（午後1時～5時）

■お詫びと訂正：

1) 前会報43号(2004年1月発行)に、ノルマ横浜・デ・モンテラチャーニさんの父親「横浜健吉」氏のアルゼンチン移民の時期が1920年代と記載されていましたが、関係者の指摘と在亜日本公使館の記録によると1910年代半ばぐらいに入国とされました(入国年月日は定かではないが、1918年の公使館邦人登録者名簿に確かに「横浜健吉、ブエノスアイレス市内に居住していた旨が記載)。関係者にお詫びを申し上げますと共に訂正いたします。

NOTA: El año de arribo del padre de la Sra. Norma Yokohama de Montelacini, D. Kenkichi Yokohama, según apreciaciones de personas cercanas y registros de 1918 de la representación diplomática japonesa en la Argentina, dan cuenta que ha llegado a Buenos Aires en la década del 10 y no del 20 como se señaló en el boletín anterior (2004-1,pág 11).

2) 前会報43号記載の叙勲者の氏名に誤りがありました。訂正します。多和田真昭氏のスペイン語表記をMasaakiとしましたが、Shinshoo TAWATAが正しいということです。

■藤沢で在日アルゼンチン人のバーベキュー

ASADO EN FUJISAWA

Ricardo Nakandakariさんの企画

日時：5月2日 12時～

場所：「観光果樹園」藤沢市、遠藤6190
KANKO KAJUEN Fujisawa-Shi, Endo 6190.
湘南台駅西口バス停1番からバスで15分
「慶応大学前」で下車

Ricardoさんがワゴン車にて迎えに上がります。携帯：090-8847-1938

参加費：男性3.500円 女性：2.500円

予約申込：Tel&Fax: 0466-43-8940 4月25日

E-mail: empanadaloca@yahoo.com.ar

■PEJERREYをメニューとして提供する旅館

「魚山亭やまぶき」オーナー：高橋光司

〒258-0201神奈川県足柄上郡山北町中川897-90

Tel: 0465-78-3911

http://www8.ocn.ne.jp/~yamabuki/

丹沢の名水でベヘレイ、ニジマス、ヤマメ等を養殖している。



■アルゼンチンに関する記事

1) アルゼンチン経済危機とキルチネル政権「アルゼンチン政治の現状」、ラテンアメリカ時報2004年3月号、杉野明(La Plata国立大学客員教授)

2) ラテンアメリカの年金改革の現状と課題「ア

ルゼンチンの年金危機を中心として」、ラテンアメリカ時報2004年4月号、浅野義(あさの ただし 茨城キリスト教大学教授)

3) 南米の都は輝きを失わない「アルゼンチン」ジェットロセンサー2004年3月号、稲葉公彦(ジェットロ-ブエノスアイレス事務所所長)

■サイト名：Mi Buenos Aires

～ブエノスアイレスでお茶しませんか？～

アルゼンチン人と結婚してブエノスアイレス郊外に住んでいる秋山和香子さんが立ち上げたホームページであるが、現地への旅行やプライベートで行く時に役立つ情報が満載である。

http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Poplar/2532/

E-mail: erimam53@hotmail.com

実用スペイン語講座 途中からも受講可能
春季2004(4月中旬～7月上旬全11回)

学習経験1年程度の方へのコースから、文法を全て終了し、フリートークを楽しみたい方のために、4レベル5コースを用意しております。

講師：リナ・フェレレ先生
会員割引適用

Tel:03-3501-4684 Fax:03-3595-3932

E-mail: argentina@nifty.com

山下美里



臨時のスペイン語講師&事務員スタッフ登録

1) 事務所のサービス向上を図るため通常の業務を補う形でパートで働ける事務員のスタッフ登録を致します。

業務内容：総務・経理の一般事務、電話での応対、イベント企画の実施等。

ホームページやメールマガジン(後者は予定)のアップデート作業が出来る人も歓迎。

スペイン語ができる人(中級以上)。

給与：時給制(1,100円+交通費)。

勤務時間：12時30分～17時30分

(13時～18時も可)

出勤希望日を指定

(時期によって週2～3日ということも有り)

2) 多様なスペイン語講座のニーズに対応するために講師の登録を致します。

REGISTRO DE MAESTROS/AS DE CASTELLANO

Se abre un registro de maestros/as de idioma castellano, nativo/a, preferentemente con algo de experiencia en la enseñanza a japoneses. Los interesados deberán enviar su curriculum vitae con sus referencias profesionales. Pueden enviarlo en WORD por e-mail (jam@ideamatsu.com), Registro de Maestros/as-Atn.Lic.J.Alberto Matsumoto.

スタッフ登録に興味ある方はメール若しくはFAXで履歴・経歴書をお送りください。

スタッフ&講師登録 担当：アルベルト松本

E-mail: jam@ideamatsu.com Fax: 03-3595-3932

目次 - INDICE

アルゼンチン食肉ミッション来日	1
マテ茶セミナー-亜国業者2社参加	1
牛肉と鶏肉事情-それ以外の肉輸出	2
マテ茶ブース大盛況 効能と生産地	3
MERCOSURがインドとFTA締結	4
米豪間自由貿易協定の亜への影響	4
最新アルゼンチン情勢-政治・経済.....	5-7
経済回復=雇用拡大でないという課題	6
何のために輸入するのかという議論	7
中国を大きなチャンスとして捉えている亜国....	7
コルドバ州知事De la Sota氏来日	8
コンゴとハイチにウルグアイと合同派遣.....	8
ExpoChacra展-農業機械など販売増	8
民主主義は確立、経済社会問題は未解決	9
ここ20年間、軍部は何をしていたのか	9
選んだ政治家に不満	10
判事の所得も課税?	10
裁判所：少ない予算でのやりくり	11
ハネムーン行き先スポット	11
信者でなくとも巡礼の体験してみても.....	11
SALTA ~雲に一番近い町~	12-14
3月12日「亜国紋章の日」	12
4月2日「マルビーナス帰還兵の日」	13
JICA日系社会青年ボランティア帰国.....	13
JICA日系研修員南米から来日.....	14
各種案内 (ASADO、関連記事、講座	15
イベント案内&お知らせ.....	16

+++++

お知らせ

- 1) 2004年別府アルゲリッチ音楽祭 5月5日~16日
別府ビーコンプラザ&大分県立総合文化センター
<http://www.coara.or.jp/~festival/>
- 2) MACHIKO KOMATSU&TANGO CRISTAL
5月19日 六本木スイートベイジル
クリスタルオフィス Tel&Fax: 03-3852-8951
<http://www.tangocrystal.com/>
- 3) 『匠の技・魂の競演』コンサート 5月19日
出演=エドゥアルド・マラガアルネラ・タンゴ
トリオ&タンゴ・トリオ・アモーレス
福山リーデンローズ 小ホール
主催者：サロン・ド・トルヴェール
TEL: 084-924-1720 <http://www.mikiduo.com>
- 4) 姫路中南米音楽愛好会 5月22日
創立50周年記念特別例会
姫路市文化センター TEL: 0792-98-8015
- 5) ANNA SAEKIタンゴコンサート
5月24日 大宮パレスホテル (ディナーショー)
5月25日 名古屋ブルーノート
5月26日 福岡ブルーノート
5月28日 広島アステールプラザ
5月30日/31日 東京スイートベイジル
6月1日 大阪ブルーノート
「冴木杏奈タンゴ保存会/かがやく女性の輪」
TEL: 082-870-1121 <http://annasaeki.free.fr/>
- 6) エドアルド・マラガアルネラ・タンゴトリオ
の演奏で踊ろう♪ タンゴパーティー2004
5月26日 (水) 18:30~21:30
横浜ホテルキャメロットジャパンB1F
ゲスト エドゥアルド・マラガアルネラ・
タンゴ・トリオ
主催 シンゴ&アスカ TEL: 03-5418-4573
- 7) タンゴ・ヴィーナス
6月25日/26日
7月7日/9日/10日/11日/16日 3,000~6,500円
振り付け・演出: シルビア・トスカノ
光藍社 Tel: 03-3943-9999
<http://www.koransha.com/tangovenus2004/tangovenus2004.htm>
- 8) タンゴダンス世界選手権日本予選
ラティナ HPを参照: <http://www.latina.co.jp/>



■天気 Tiempo en Argentina

アルゼンチンの季節：秋 Buenos Airesの天気：
最高気温：16℃ 最低気温：7℃ (4月19日)
予報：秋が深まってきており気温も南風の影響で
下がってきている。

<http://www.meteofa.mil.ar/> 空軍の気象庁

■為替情報 Cotizaciones

Dolar libre (casas de cambio 外為取引許可を受けて
いる両替屋) DOLAR EURO

Comprador 買い	2.78	3.3357
Vendedor 売り	2.82	3.3840
MERVAL 1162.17	全て4月19日の数字	

- 普通預金金利 年率：18.85%
- 個人ローン15,000ペソ迄 利率：19.90%
- 住宅ローン 3~20年のローン
融資額が200,000ペソの場合 15%~20%
商業融資や住宅ローンがまだ活発でない理由が
これでわかる。市場はまだ警戒しており、金利
は高い。

編集長-EDITOR: J. Alberto MATSUMOTO

編集委員-Colaboradores: 塩見憲一 理事、イレー
ネ賀集 理事、萩村昌代 委員。

<http://www.argentina.jp/>

Tel: 03-3501-4684 (月、火、水、金: 13時~17時)

Fax: 03-3595-3932 E-mail: jam@ideamatsu.com